基調講演Ⅱ
文化芸術・集客エンタメの本質的価値とは何か～脳科学の視点から～

脳科学者　茂木 健一郎 氏

脳科学の立場から集客エンタメ産業を考察すると、大変面白い点がいくつかあります。まず大ヒットというのは、どのようにして生まれるかということです。我々の脳科学では偶有性という言葉があります。偶有性というのは予想がつかないものと安心安全のものが入り混じっている状態とでも言うのでしょうか。過去の大ヒットをみなさん振り返っていただきたいのですが、必ずそういう要素が入っているのです。例えば何十回もリピートして観たという人もいたジョージ・ルーカスの『スター・ウォーズ』なんかは、非常に冒頭から斬新で予想がつかない作品です。だけど物語そのものは、若者が姫を助けるという非常に安心できるストーリーです。このような2つの要素を持つものが、エンタテインメントにおける大ヒットでほぼ例外はないと思います。『鬼滅の刃』も人間と鬼という設定は斬新でしたが、一方で友情だとか助け合うだとか、人が生きることの大切さとかそういったものを描いているという意味においては、何か安全基地、セキュアベースと言いますが、そういったものに相当するものに着地している。このように、大ヒットを生み出すためにはこの偶有性を究明すれば良いのですが、それを分かっていたらみなさん苦労はしません。

都倉長官のお仕事として金字塔はピンク・レディーだと思っていますが、ピンク・レディーが出て来た時に、当時僕は小学生でしたが男の子だけではなく特に女の子が熱狂しておりました。千葉から出て来たちょっと純朴な二人を、ああいった設定で阿久悠さんと『UFO』や『ペッパー警部』、『サウスポー』とか1曲ごとに全く予想がつかないような展開をみせていた。そこはサプライズ、予想できないところです。それに対して健康でかわいい2人が一緒になって踊るという、そこに当時の小学生を非常に惹きつけて、釘づけにした。後付けで見ると、このようなピンク・レディーの大ヒットというのは偶有性そのものだったなと思います。でもそれを予め予想できないところが難しいし、二匹目のどじょうは居ないというわけではないけれど、小さくなっていきますよね。『スター・ウォーズ』シリーズは未だにフランチャイズが進んでいますが、やはり一作目のインパクトに比べるとどうしても弱くなってしまうし、『鬼滅の刃』も無限列車のヒット後もずっと続いていますが、やはりこの後フランチャイズとして、ずっと新鮮さを保っていくと言うのは大変難しいと思います。脳の仕組みからいうと偶有性というのがエンタテインメントの本質ですが、もう1つ実はみなさんと共有したい認識がありまして、それは何かというと、エンタメに於ける「プレミアム」とはなにかという問題です。ボブ・ディランとか、ビリー・アイリッシュ、エリック・クラプトン、こうした人たちのユニークさとか唯一無二性とは何

でしょうか。これは実は集客エンタメ、特に都倉長官が仰っていたライブの意味を考える上で、ものすごく重要な事だと思っています。つまりプレミアムというのは不思議なもので、僕はあまり高いワインはわかりませんが、ワインがお好きな方はロマネコンティがどうのこうの、シャトーなんとかがどうのこうのと言いますよね。アルコールを飲んで良い気持ちになるというのであれば、別に千円くらいのワインでも美味しいのに、ではなぜロマネコンティだとかシャトーなんとかだと高いお金を出して飲むのかというと、唯一無二性とかユニークさなのです。我々の言葉でいうと、そこに「クオリア」があるわけです。何とも言えないクオリアがあるわけです。ビリー・アイリッシュの歌には何とも言えないクオリアがある。ブルーノ・マーズもドームで観ましたが後ろの観客が発狂していました。気持ちはわかりますよ、ブルーノ・マーズが目の前で動いているのですから、生で。何でブルーノ・マーズでないとダメなのかというのは、クオリアなのです。絶対唯一無二のクオリア。少し古くなるのですが、昔京都の会合に西城秀樹がゲストで来ていて、ステージの横で自らBGMのスイッチを入れて出てきて、西城秀樹が歌ったのです。たった100人くらいの観客に向けて営業されていたのですが、感動しました。ああいった、唯一無二感というのはライブじゃないと出てこない。この唯一無二感というのが、僕は集客エンタメ産業の本質だと思っています。これをどう見つけるか、ホリプロのようなプロダクションは、そういった原石を見つけて育てていくというのがお仕事だと思うのです。

ちょっと脳科学的な真面目なお話をすると、矢内社長と都倉長官共同提案のSDGs18番目の目標として、集客エンタメ産業という文化産業が大事だと仰ってますが、これは脳科学的に説明すると、結局レジリエンスということに繋がっていくわけです。このレジリエンスというのは、困難とか苦しいことに負けずに前向きに生きる力というのと非常に深く結びついています。ポール・マッカートニーの来日公演に行って、僕はポールが水一滴も飲まずに3時間のステージを務めあげるのを観ていましたが、ポール・マッカートニーのステージを観ることで、先ほどの唯一無二性はもちろんあるのですが、生きる力とか困難に負けずに明日からも頑張っていこうという力ももらうと。これをもっと脳科学の言葉で説明すると、パターン学習ということなのです。その人の楽曲・表現・生き方そういったものに表れている、ある種の生きる上での世界認識のあり方、感情のコントロールの仕方、全てを我々は受け止めて、何か生きる上でのレジリエンスに繋げていく。これからの地球は環境問題や地域紛争など、非常に困難に満ちた状況になることが予想されています。食糧問題やエネルギー問題など様々な困難に向かっていかなければならないのです。かつて平田オリザさんはこんなことを言っていました、「古代ギリシアのある都市に演劇というものが発見されたことが記録でわかっているんだ」と。「その演劇というのが、あまりにも効果的だったので市民の義務になったのだ」と。演劇を観ることが市民の義務になった、カタルシスですよね、感動ですよね。それが市民としての教養の非常に深い根っこになった、というようなことを仰っておりました。僕は脳科学の立場からすると、それは本当にあり得るなと思います。僕はポール・マッカートニーの3時間のステージを観て、何かそこからパターン学習というか、ポールの生きる上での深いところでのレジリエンス、サステナビリティを受け取ったような気がします。

時々僕が中高生に言うのですが、『Yesterday』という曲の由来を知っているかと。みなさんはご存知ですか？あれはポールの頭の中で突然出来た曲です。これを脳科学で言うと本当に面白くて、良くできた曲ほどライブと同じなのです。歴史に残るような楽曲とい

うのは、突然出来ているのです。ポールは突然『Yesterday』という楽曲が頭の中にあって、周りに聞いたのです。「ジョン、この曲俺が作った曲ではないと思うのだけど、どこの曲かな」とか。で、2ヶ月ほど経ってどうも自分が作った曲らしいといって、『Yesterday』という曲ができたのです。『Yesterday』という曲は、普通に考えたら失恋の曲だと思うのです。*“何か私が悪いこと言ってしまったから、彼女は私のもとを去ってしまった”*のだと。ポールが14歳の時に、彼のお母さんが乳がんで亡くなっているのです。あの『Yesterday』という曲は、ポール自身も気が付かなかったのですが、彼のお母さんの歌なのです。そう考えると歌詞が凄すぎるというか、*“なぜ彼女は去らなければならなかったのか、私はわからない、彼女は何も言わなかったから。僕がなにか悪いことを言ったのかな”*そんなはずないじゃないですか、だって彼のお母さんは乳がんなのだから。だけど少年の心で、何かお母さんに悪いことを言ったのかな、と思わせてしまうのが芸術の力です。

ポールは、『Yesterday』だけでなく色々な曲を書いていますが、唯一無二な芸術というのは、何かそういったものが伝わってくるわけです。それに出会った時に人間の脳はそれを曖昧な言葉で説明しがちですが、感動したとか、生きる力を貰ったとか。脳の中では極めて具体的な神経細胞の活動が起こっています。扁桃体という感情の中枢のところですとか。今注目されているのは前頭葉のリアプレイザル（reappraisal）という、「同じ現象を見てもどのように再解釈するかということが違う」と。例えばコップの水が半分しかないと思うのか、まだ半分もあると思うのか。もうこんなに年を取ったと思うのか、私の残りの人生で今日が一番若いと思うのか。これが脳のリアプレイザル＝再解釈という概念です。これを支えて育んでくれるのがエンタテインメントではないでしょうか。僕は子どもの頃チョウの研究をしていて、それから物理学をやろうとして物理をやり、今は脳科学をやっています。子どもの頃から実はエンタメというのは僕の心のなかにずっとあって、僕という人生・人間は、集客エンタメ産業によって支えられてきました。今日はスポーツ関係の方もこのあと出られますけど、僕は東京球場（東京スタジアム）で観た試合で観客がヤジを飛ばすのを鮮明に覚えています。エンタメというのはそういったものです。

みなさん誤解していますが、脳はたった一度経験したことだって忘れないのです。その経験が、ライブならば。パトリシア・クールというアメリカの研究者が、アメリカの子どもたちに中国語の発音を覚えさせるために、テープで中国語を聞かせる研究をおこないました。子どもたちにビデオを見せても、ビデオを通してテレカンファレンスでその中国人のインストラクターと子どもが話してもダメなのです。唯一効果があるのは、目の前に中国人のインストラクターがいて、一緒に遊んでくれる、この時に初めてアメリカ人の子どもは中国語の、英語にはない母音の発音を習得したという非常に古典的な研究があります。人間の脳には「ミラーニューロン」というものがあって、目の前で、ライブで誰かがやっている時に、鏡のように活動する神経細胞があるのです。これは目の前で、ライブでやっていないとダメなのです。勿論、将来テクノロジーが進んでメタバースが出来て、色々なバーチャルな情報のやり取りが出来るようになったら、目の前で人が演じているのと同じような感動を与えるようなものが出来るかもしれないし、そのような技術の可能性を僕は決して否定するものではないのですが。幼少期において、特に小学校低学年とか幼稚園とかそういった子どもたちは、目の前でライブでやっていないとダメだというのは経験的にもわかっているし、先程のパトリシア・クールの実験なんかでもそういったことは

示されている。その背景にあるのは、ミラーニューロンという脳の中の特別な神経細胞だということでございます。

今、生成AI＝ジェネレ―ティブAIというのが大変注目されています。ChatGPTという、これは我々研究者にとっても100年に一度の衝撃でした。本当にこれは凄いことだと思います。呂布カルマさんという、寛容ラップというCMで有名になった名古屋在住のラッパーがいるのですが、彼とこの前会った時に、呂布カルマさんは全く脅威を感じていませんでした。ChatGPTに書けるようなラップの歌詞は、ラッパーの書く歌詞には及ばないと彼は信じていらっしゃる。これは科学的にはかなり難しい問題です。僕は先日バンクーバーであったTEDという会議に参加しまして、そこで休憩中に突然ジョージ・ハリスンの『Here Comes the Sun』が流れたのです。あの曲はジョージがビートルズのごたごたで参っている時に、エリック・クラプトンの家に滞在中に太陽が差し込んできた時に突然浮かんだ曲です。僕はそれを聴いた時にジョージ・ハリスンの『Here Comes the Sun』は、AIでは作れないんじゃないかと直感的に思ったのです。これに全く理論的な根拠はありません。今ひょっとしたら、それこそお絵描きとか映像とかジェネレーティブAIでどんどん作れるようになってきているし、国としてもジェネレーティブAI＝生成AIの研究というのはどんどんやっていくのでしょうから。ただ僕は先ほどのポールの『Yesterday』もそうですし、ジョージ・ハリスンの『Here Comes the Sun』もそうですが、何かその人の人生の中で一生懸命生きてきて、身体を持つ我々人間の1回だけの人生だからこそ出てくるものがあるのではないか。千代の富士がかつて引退の時に「体力の限界」と言ったりとか、勝新太郎が「これからはパンツ履かない」と言ったりとか、ああいった人生の中で突然出てくる言葉の持っている力と同じようなものが、ジョージ・ハリスンの『Here Comes the Sun』にはあるような気がして。それはひょっとして1人だけで生まれるものではなくて、オノ・ヨーコがジョン・レノンに出会ったことによって『Imagine』という名曲が登場したように。オノ・ヨーコが『grapefruit』という元々詩のような現代アートの作品集を作っていて、そこから着想を得て生まれたのが『Imagine』で、今ではあれはオノ・ヨーコとジョン・レノンの共作と正式に認定されています。そうやって2人の人間が出会うことでしか生まれない何かもあるだろうし、それはライブステージで共演ということで、その場で生まれるものもあるだろうし。そう考えると、ライブエンタテインメントとは生きる力そのものなのだなと思います。それを我々しつこいようですが曖昧に言いがちですよね。小学校の道徳の教科書のように、「ライブエンタテインメントには生きる力を与える可能性があるのです」とか。そうではないのです、脳科学をやっている立場からすると、そのように我々が曖昧に思っているものほど、実は非常に具体的に脳の中で感情とか前頭葉とか言語とか記憶とかそういったところの回路を巻き込んで起こっているということを申し上げたいと思います。

先ほど、都倉長官が日本の文化を京都から発信していきたいと仰っていましたが、僕は脳科学の研究をしていまして、僕のライフワークは脳から意識がどう生まれるかというクオリアということがライフワークです。最近東京大学の駒場キャンパスでは、「集団知能」＝「コレクティブインテリジェンス」という研究をしていまして、これはまさにライブエンタメもそうですが、いかに人々が力を合わせてパフォーマンスを高めていくか創造性を発揮できるのかなどの研究をしていたりもします。その一方で、数年前から英語で日

本のことを表現する仕事をさせていただいています。海外では2017年に『IKIGAI』という本を書いて、これが自分で言うのもなんですが大ブームになっておりまして。“生きがい”というのは日本人の生命観の本質にかかわることで、つまり我々はそんなにお金とかばかりに生きているわけではないのです。アメリカに行くと個人総資産がいくらだとか、ネットワースがいくらだとかいいますが、例えば良く取り上げられる例が、東京駅に新幹線が着きますと“7分間の奇跡”と言って掃除をされる方々があっという間に車内を整えて次の発車まで準備をする。あれがハーバード・ビジネス・スクールの教科書にも取り上げられていたりするのです。日本人の持っている仕事の価値というものを精神的な、例えば掃除をするというのはお寺での修行の中心です。アメリカ人にとって掃除をするというのは、取るに足らないことかもしれないけれど、我々にとってはとても大事なことです。そういったことが、お寿司が世界一のものになっているとか色々なことに繋がっているわけで、それの中心になっている考え方が生きがいというもので、これを脳科学の知見を含めて紹介した本が2017年に出ました。そして昨年はまずイギリスで出版され、アメリカでは1月に『The Way of Nagomi』という和みの道という本を出しました。これはどういう本かというと、我々日本人の生命哲学の中に“和み”というものがあると。聖徳太子が「十七条の憲法」で「和を以て貴しとなす」というところから始まって、食文化もカツカレー、これはすごくないですか？ カツは元々フランス料理ですよ。カレーはインド料理でしょう、それを混ぜる日本人はなんだ、カツカレーってなんなんだ。“Cutlet”、“Pork Cutlet”ってポーク食べてなかったんですよ？ それでカレーはインド料理でしょう。それを混ぜる日本人は何なのか、カツカレーって何なんだ。抹茶アイスって何ですか、抹茶にアイスを混ぜるんですよ。こういった日本人の和みというものを徹頭徹尾、生命哲学やウェルネス、健康、例えば森林浴や里山とか、そういったものを通して解説したのが『The Way of Nagomi』という本です。『IKIGAI』の本は新潮社から翻訳も出ているのですが、和みの本がどこから出るか僕のエージェントが絶賛交渉しているところのようです。英語で日本の文化の価値を発信するということを何故やろうかと思ったかというと、学会等で色々言って結局日本はこれだけ注目されていて、北川フラムさんは現代アートで地域での取り組みをされていて、瀬戸内国際芸術祭なんかは本当に世界からディスティネーションで来るようになったわけですけれど。文化的にも日本はものすごく注目されていて、それこそ草間彌生さんがルイ・ヴィトンでフィーチャーされたり、里中満智子先生のようにマンガ、これは本当に日本の誇る文化で、アニメやマンガを通して日本ファンになる人も多いのですが、それにもかかわらず、我々はその背後にある生命哲学を説明していないのです。金継ぎなんて今やバズワードになっていて、器が壊れても棄てないのですから。それを使っていると更に前より良いと。人間関係だってそうです。別にいいじゃないですか、僕が松本人志さんの悪口を言ったって。また仲良くすればいいのです。金継ぎすればいいのです。「ジャニーズは学芸会」と言ったって良いではないですか、僕は岡田准一くんとかと仲良いですから、金継ぎすればいいのです。むしろ自分の意見をお互いに言い合って、丁々発止で意見が違っても仲良くするのが日本の伝統だし、だから十人十色という諺もある。我々日本人は自分たちには個性がない、個性がないと思い込んできたけれど、そんなことはないでしょう、この国。それがあのホリプロさんもそうですけど、日本のエンタメ界の多種彩々たる、出雲阿国なんかも女性でああいったことをおこなった人がいるわけですから、なかなかこの日本のエンタメの総合力というのは凄いものがあると思います。最初に申し上げましたように、偶有性を通したレジリエンスへの寄与、それから唯一

無二性これはまさに個性です。十人十色のエンタテインメントの基礎です。本当に唯一無二の価値、そこからプレミアムというものが生まれて、チケットぴあ的にはチケットの代金が上がった方が良いわけですから、唯一無二のエンターテイナーがいるとその人にはプレミアム価格を出しても観たいわけです。そういったものが日本でもこれからもっと増えていけば良いだろうし。やはりインバウンドの方々にとっても、例えば忍者ショーなんてものすごい需要があります。まだ我々がわかっていないだけで。忍者の時価総額は海外では日本の100倍くらいあるわけです。日本のエンタメはいくらでも可能性があると思うので、僕はSDGsの18番目をエンタメにするというのは大賛成で、それは我々の内面の平和、内面の持続可能性の問題なのです。外の経済状況とか教育を整えることはもちろん大事ですが、最後は我々の脳が世界を認識して世界とやり取りして、そしてこの世界を平和で繁栄して豊かで持続可能な場所にしていくわけですから。この心のオペレーティングシステムを整える仕掛けとして、是非SDGs18番目に文化芸術・エンタメを加えるということには大賛成したいと思います。